

真庭市埋蔵文化財調査報告 5

大旦遺跡・金屋1号墳

市道上連線・金屋東線改良工事
に伴う発掘調査

2011

真庭市教育委員会

序

真庭市には、先祖より引き継がれてきた数多くの文化財・文化遺産が有形・無形を問わず豊富に遺されています。そのなかでも埋蔵文化財・遺跡というものは、私たちの身近にあり、親しみのある存在でもあります。

このたび市道上連線および市道金屋東線の改良事業に伴い、大旦遺跡と金屋1号墳の発掘調査を実施しました。大旦遺跡については、市道上連線改良事業に伴う発掘調査としては平成18年度に実施して以来のものになります。調査の結果、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての貴重な資料が得られることになりました。また金屋1号墳につきましても、これまでその詳細はほとんど不明でしたが、調査により内容の一端をあらかとす手がかりを得ることとなりました。

調査成果を収めた本書が、当地域の歴史の解明や埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで、広く活用されることを願う次第であります。

最後になりましたが、調査および本書の作成に際しましては、関係者ならびに地元の皆様から多大なご支援とご協力を賜りました。末筆ではありますがここに記して厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

真庭市教育委員会

教育長 大倉 貢

例 言

- 1 本書は、真庭市建設部建設課の依頼を受け真庭市教育委員会が発掘調査を実施した、大旦遺跡（真庭市台金屋537-1外）および金屋1号墳（真庭市目木2005）の発掘調査報告書である。
- 2 大旦遺跡は市道上連線改良事業に、金屋1号墳は市道金屋東線改良事業にそれぞれ伴い、発掘調査を実施することとなったものである。
- 3 大旦遺跡の発掘調査は、平成21年度（1～2月）に池上 博・坂田 崇が担当して実施した。調査面積は151㎡である。また金屋1号墳の発掘調査は、平成22年度（6月）に坂田が担当して実施した。調査面積は12㎡である。
- 4 本書の執筆・編集は坂田が行った。
- 5 金屋1号墳の調査にあたっては、現地に於いて森上知洋（真庭市文化財保護審議会委員）、白石 純（岡山理科大学、真庭市文化財保護審議会委員）の各氏よりご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。
- 6 出土遺物・図面・写真等は、真庭市教育委員会（真庭市落合垂水1901-5）にて保管している。

凡 例

- 1 本書で用いた高度は海拔高である。また、方位について、第1・2・3・9図は世界測地系の座標北であり、それ以外の図は磁北である。
- 2 第2図は国土地理院発行の1/25,000地形図の横部・美作宮原・勝山・久世を使用し加筆したものである。
- 3 本書に掲載した遺構・遺物実測図の縮尺率は下記により統一している。

遺 構

竪穴住居：1/60 土壘：1/30

遺 物

土器：1/4 石器：1/2

- 4 遺構番号は、遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。
- 5 遺物番号のうち土器以外のものについては、その材質を示すため番号の頭に次に示す略号を付した。
石器：S
- 6 土器の実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径の測定が困難なものである。

目 次

序	
例言・凡例	
目 次	
第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 大旦遺跡	4
第1節 調査の契機と経緯	4
第2節 発掘調査の経過	5
第3節 遺跡の概要	6
第4節 遺構・遺物	7
第3章 金屋1号墳	10
第1節 調査の契機と経緯	10
第2節 発掘調査の経過	11
第3節 発掘調査の概要	11
第4章 まとめ	14

図版
報告書抄録
奥付

図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第3図 調査区位置図 (1/1,000)	4
第4図 遺構配置図 (1/250)	6
第5図 竪穴住居1 (1/60)	7
第6図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	8
第7図 竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/4)	9
第8図 土壇 (1/30)	9
第9図 古墳位置図 (1/1,000)	10
第10図 墳丘測量図 (1/150)	12
第11図 調査区平面・土層断面図 (1/40)	13

図 版 目 次

大旦遺跡

図版1	1 調査区全景 (北から)
	2 竪穴住居1 (北から)
図版2	1 竪穴住居2 (南から)
	2 竪穴住居2 (東から)
	3 紡錘車 (S2) 出土状況
図版3	1 竪穴住居3 (北から)
	2 竪穴住居3 (西から)
	3 土壇 (東から)
図版4	出土遺物

金屋1号墳

図版5	1 墳丘全景 (南から)
	2 墳丘全景 (南西から)
	3 葎石検出状況 (北西から)
図版6	1 東西方向土層断面 (南から)
	2 調査区完掘状況 (南から)
	3 調査区完掘状況 (北から)
図版7	1 南北土層断面 (南西から)
	2 南北土層断面近景 (西から)
	3 南北土層断面 (北から)

第1章 地理的・歴史的環境

真庭市は岡山県北部の旧美作国西部に相当し、東は津山市・鏡野町・美咲町、西は新見市・新庄村、南は高梁市・吉備中央町、北は鳥取県とそれぞれ境を接している。面積は828.43km²と目下のところ県下市町村中で最大であるが、面積の大半は山林が占めている。

大旦遺跡の所在する真庭市台金屋地区は真庭市域の南半部東部にあたり、岡山県の中央部を南流する旭川の上流域に位置している。旭川は久世の市街地で流路を東から南に大きく蛇行するが、これは北から南に延びる河岸段丘が突き出しているためである。この段丘の東には旭川の支流である目木川が市街地の東端で本流の旭川と合流している。この旭川と目木川の合流によって形成された沖積平野は久世地区における最も大きな平坦地形であり、現在主要な集落はこの平野に立地している。

大旦遺跡はこの旭川と目木川によって形成された沖積平野を南に望む標高約180m（沖積平野との比高差約40m）の低丘陵上に位置し、市内でも屈指の大規模な集落遺跡であるとみられる。

縄文時代

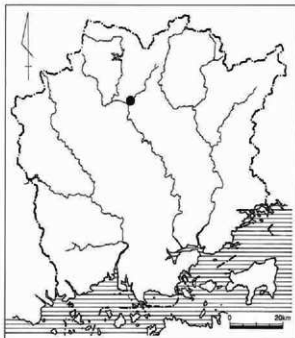
久世地域において現在まで知られている最古の遺物は縄文時代早期の押型文土器で、この大旦遺跡¹⁾のほか上野遺跡²⁾、薬王寺西山遺跡³⁾、長光寺山遺跡⁴⁾などで発見されている。上野遺跡では前期の土器も採集されている。中期では目木川上流の江森遺跡⁵⁾（余野上遺跡）が知られるのみである。後期では上野遺跡、三坂川流域の三栄神社裏山遺跡⁶⁾、小谷川流域の宮芝遺跡⁷⁾、晩期では五反遺跡⁸⁾で鉢形土器が出土しているほか、且山遺跡と惣台遺跡⁹⁾から落とし穴遺構が検出されている。いずれの場合も河川を見下ろす丘陵上に複合して認められる場合が多い。

弥生時代

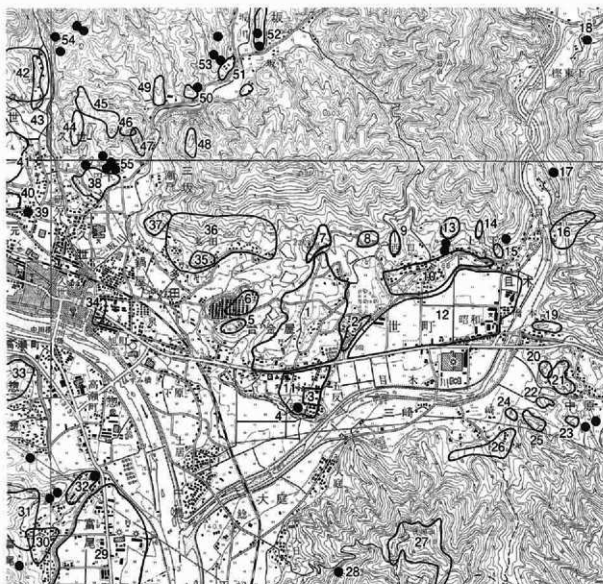
弥生時代になると、五反遺跡で前期後葉の土器が出土しているのみで、集落遺跡が飛躍的に増加するのは中期後葉から後期前葉にかけてである。主要な遺跡としては、目木川流域では且山遺跡、惣台遺跡、野辺張遺跡¹⁰⁾、木谷遺跡¹¹⁾、上野遺跡などがあり、目木川と旭川に挟まれた地域では五反遺跡、大旦遺跡、宮芝遺跡などがある。しかしながら比較的大規模な弥生時代の集落跡が展開しているにもかかわらず、弥生時代の墳墓については現在まで知られていない。

古墳時代

古墳時代に入ると数多くの古墳が各水系を見下ろす丘陵上に築造されるようになる。前方後円墳としては小規模ではあるが、惣古墳群のアタゴ山5号墳と堂ノ且1号墳が知られている。5世紀の中葉には古墳の築造が活発となり、中原古墳群¹²⁾のように低平な墳丘の方墳・円墳が丘陵尾根上に



第1図 遺跡位置図



- | | | | |
|------------|---------------|--------------|------------|
| 1 大旦遺跡 | 16 木谷古墳群・木谷遺跡 | 31 丸山古墳群 | 46 羽庭6～8号墳 |
| 2 金屋1～4号墳 | 17 イガ平1号墳 | 32 上の段遺跡 | 47 池河内遺跡 |
| 3 五反楽寺 | 18 アタゴ山古墳 | 33 アタゴ山古墳群 | 48 茶臼山城跡 |
| 4 五反1号墳 | 19 宮ノ亂1～3号墳 | 34 網屋遺跡 | 49 三坂1～4号墳 |
| 5 長光寺1～6号墳 | 20 且山1～5号墳 | 35 稲荷神社表山遺跡 | 50 郷庄尻遺跡 |
| 6 蛇ノ尾1～3号墳 | 21 且山遺跡 | 36 多田1～11号墳 | 51 野田遺跡 |
| 7 新池1～6号墳 | 22 野辺原遺跡 | 37 平ノ上遺跡 | 52 東坊子遺跡 |
| 8 細シ遺跡 | 23 先且山遺跡 | 38 池河内遺跡 | 53 野田1・2号墳 |
| 9 多田須遺跡 | 24 鳩ヶ鼻遺跡 | 39 真光寺前古墳 | 54 小谷1～4号墳 |
| 10 西口遺跡 | 25 惣台遺跡 | 40 上ヶ市遺跡 | 55 羽庭1～5号墳 |
| 11 五反遺跡 | 26 三崎1～8号墳 | 41 宮芝遺跡 | |
| 12 日本埋没条里 | 27 篠向城跡 | 42 小谷古墳群 | |
| 13 戸坂遺跡 | 28 篠向1号墳 | 43 小谷遺跡 | |
| 14 上ノ山遺跡 | 29 富尾埋没条里 | 44 羽庭14～18号墳 | |
| 15 引原敷遺跡 | 30 井ノ上遺跡 | 45 羽庭城跡 | |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

多く築かれるようになる。後期には各所に群集墳が形成されるようになる。特徴的な成果のあった調査例としては、装飾付脚付子持壺やトンボ玉などの多彩な遺物が出土した木谷古墳群 11号墳が挙げられる。集落跡としては、前期では大旦遺跡¹³⁾で住居跡等を検出しているのが現在のところ唯一の事例である。なお、後期の集落跡は惣台遺跡や先旦山遺跡¹⁴⁾でこれまでに確認されている。

古代以降

白鳳時代には五反庵寺¹⁵⁾が造営される。五反庵寺は大庭臣により造営されたと考えられ、美作国の最西端に所在する古代寺院跡である。周囲からは軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾が出土しており、軒丸瓦は現在のところ7種類、軒平瓦は6種類が確認されている。なかでも内区に木の実状の文様、菊花状の文様を配置した瓦当文様は県内では類例を見ないものである。寺域は1町四方の説が今日では有力である。

一方、吉備五郡に白猪屯倉を置いたと記している『日本書紀』や『続日本紀』などから旧大庭郡内に白猪屯倉が設置されていた、という説もあるが定かではない。また、大旦遺跡から東へ約1km隔てたところには、10数点の墨書土器、陶製円面硯および獣足壺の脚部が出土し、大庭郡街跡に比定されている西口遺跡¹⁶⁾が存在している。その他、古代の耕地割制度といわれる条里が久世地区でも4ヶ所で確認されているが、目本の条里¹⁷⁾は中世に区画された耕地割の可能性が指摘されている。

註

- 1) 「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』57 岡山県教育委員会 1984
「大旦遺跡発掘調査報告」『真庭市埋蔵文化財調査報告』2 真庭市教育委員会 2009
- 2) 「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91 岡山県教育委員会 1994
- 3) 松本和男・船津昭雄「第2章 久世の夜明け」『久世町史』久世町 1975
4～8) 註3に同じ。
- 9) 「旦山遺跡・惣台遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 岡山県教育委員会 1999
- 10) 「野辺張遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 岡山県教育委員会 1999
- 11) 「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 岡山県教育委員会 1995
- 12) 「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 岡山県教育委員会 1995
- 13) 「大旦遺跡発掘調査報告」『真庭市埋蔵文化財調査報告』2 真庭市教育委員会 2009
- 14) 「先旦山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 岡山県教育委員会 1999
- 15) 「五反庵寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』2 久世町教育委員会 1997
「五反庵寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』4 久世町教育委員会 2000
- 16) 註3に同じ。
- 17) 『目本条里発掘調査報告書』久世町教育委員会 1982

第2章 大旦遺跡

第1節 調査の契機と経緯

旭川と目木川の合流によって形成された沖積平野は久世地区における最も大きな平坦地形であり、真庭市のなかでも主要な集落遺跡はこの平野に立地している。大旦遺跡はそのひとつである。

大旦遺跡の所在が知られることとなったのは、昭和29(1954)年に耕地整理を兼ねて瓦裂作用の粘土を採掘していたところ弥生時代の貯蔵穴が検出され、緊急の調査が行われたことを契機とする。このときには9基の貯蔵穴が検出・確認され、その個所は昭和38(1963)年に久世町(現真庭市)指定史跡に指定されている。

昭和56(1981)年には台金屋地区一帯で「農村総合整備モデル圃場事業」を実施する計画が立ち上がり、それを受け、岡山県教育委員会による確認調査が昭和58(1983)から翌年にかけて実施されることとなった。その結果、縄文時代早期から古代にかけての遺構・遺物を多数検出・出土しており、時代・面積ともに大変広範囲な集落遺跡であることが判明した。近年では、市道上連線改良事業に伴う発掘調査を平成18年度に、市道多田金屋線改良事業に伴う発掘調査を平成21年4月に実施している。

平成21(2009)年、真庭市教育委員会は真庭市建設部建設課より市道上連線改良事業の実施にあたっての埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて協議を受けた。包蔵地の現状保護・保存を前提に協議を重ねた結果、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することで合意をした。真庭市建設課より埋蔵文化財発掘の通知を平成21(2009)年11月25日付け、真建設第168号で提出され、これを受けて真庭市教育委員会で発掘調査を実施することとなった。



第3図 調査区位置図(1/1,000)

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成22(2010)年1月25日から2月9日まで、実働日数10日間を要して実施した。なお、埋蔵文化財発掘調査の報告については平成22(2010)年2月8日付け、真教生第178号で岡山県教育委員会へ提出している。

今回の調査対象区域は、平成18年度に調査を実施した市道上遊線と同じ路線上にあり、北側の区間に相当する部分である。そのため、前回の調査結果からも住居跡等の遺構が検出される可能性が十分に想定された。そのため、表土については重機を使用して調査対象範囲の全面を除去し、その後人力による遺構の検出、という手順により精査を行っていった。

(調査の体制)

調査主体者	真庭市教育委員会
事務局	真庭市教育委員会
	教育長 大倉 賢
	教育次長 大植昭一
	生涯学習課長 内山恵美子
調査担当者	参事 池上 博
	主査 坂田 崇
作業員	黒瀬 肇、永田敏宏
	二宗久夫 (50音順)



調査風景 (竪穴住居2検出作業)



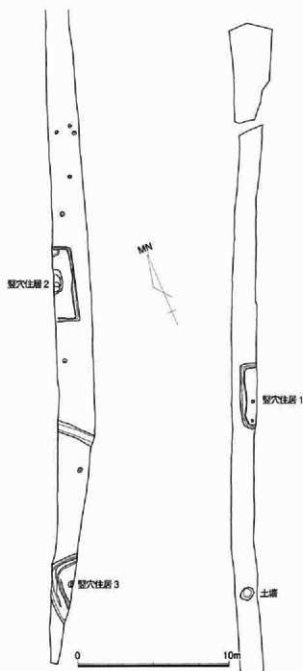
調査風景 (竪穴住居3検出作業)

第3節 遺跡の概要

今回発掘調査を実施した区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地として認識されている大且遺跡の概ね北西部に相当する。調査面積は151m²である。

今回の調査区は、台金屋地区の所在する丘陵上の比較的平坦な場所であり、平成18年度に発掘調査を実施した市道上連線の北側区間に相当する。現況は平坦な畑地であり、平成18年度の調査に相当する数量の遺構・遺物を検出・出土するものと想定していた。

調査の結果、遺構として3軒の竪穴住居および1基の土壇を検出している。標高的には遺構検出面で概ね190m前後になる。今回も調査区が細長い形態となったものであるが、調査範囲の長さに対して遺構の分布が比較的疎らである。このことから断定はできないが、集落跡の中心域よりはずれた縁辺部に近い場所であることが考えられる。竪穴住居は3軒ともに平面形が方形または隅丸方形になるものである。遺物としては、土師器をはじめとする土器類および磨製石庖丁や紡錘車といった石器類を出土している。



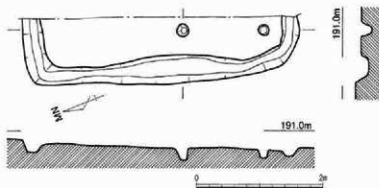
第4図 遺構配置図(1/250)

第4節 遺構・遺物

竪穴住居1(第4・5図、図版1)

検出した遺構では最北に位置する。大半は現道の下にあり、西側の一部のみを確認した。後世に大幅な削平を受けている模様であり、壁体溝とピットの下部のみを確認している。平面形は方形になるものと考えられる。北隅が概ね直角状であるのに対し、南隅はやや丸みをおびている。規模としては南北方向で長さ440cmを測る。壁体溝は確認した限りではすべて連続している。柱穴とおぼしきピットを2基確認しているが、明確なものではない。

遺物としては弥生土器・土師器の破片を出土しているが、細片ばかりであり図示できるものはない。



第5図 竪穴住居1(1/60)

時期としては出土遺物および住居の平面形態から弥生時代後期末～古墳時代初頭とみられる。

竪穴住居2(第4・6図、図版2・4)

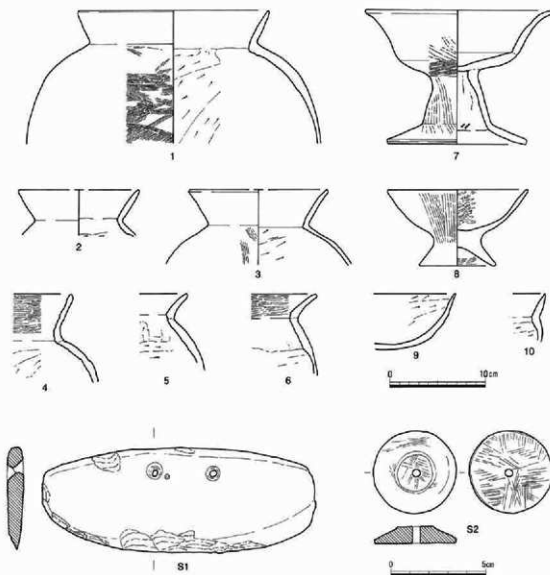
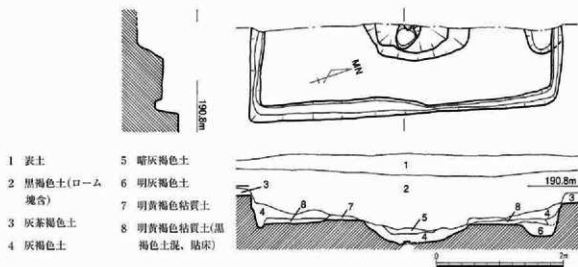
調査区の南半部に位置する。西側部は畑地の下にあり、東側部分を確認した。平面形は方形ないしは長方形のものと考えられる。南隅は北隅に比べやや鋭く曲がっている。規模としては南北方向で長さ495cmを測る。検出面から床面までの深さは45cmほどである。床面の施設としては、壁体溝および南北軸のほぼ中央において不整形な土塊状のくぼみを確認している。壁体溝は確認する限りにおいてすべて連続している。土塊状のくぼみについては最初、中央土塊かと考えたが、底面において径30cmほどの円形ピットを検出したことから、柱材抜き取りのための掘削による痕跡かとみられる。その証左のひとつとして、住居南側部の覆土を除去していたところ、黒褐色土を混じる明黄褐色粘質土のブロックが床面直上まで多量に堆積しており、それが土塊状くぼみを掘削した際の排土であると考えたためである。また、竪穴住居2と重複する遺構として、北壁際において土塊を1基検出している。これは貼床を除去した際に確認したものであり、構築順序としては竪穴住居2に先行するものである。

遺物は土器として、古墳時代初頭の土師器を中心に出土している。土師器は主なものとして、甕1～6、高杯7・8、鉢9、小型丸底壺10がある。土師器のほか、少量の弥生時代後期の土器および縄文時代前期の土器が出土している。石器としては、磨製石庭丁S1および滑石製紡錘車S2が出土している。

住居の時期は出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。

竪穴住居3(第4・7図、図版3・4)

調査区中で最も南に位置する遺構である。竪穴住居2とは幅70～80cmほどの浅い溝状のくぼみを挟んで位置する。壁体溝が内外で2本確認されたことから、建替えを行っていることがうかがえる。

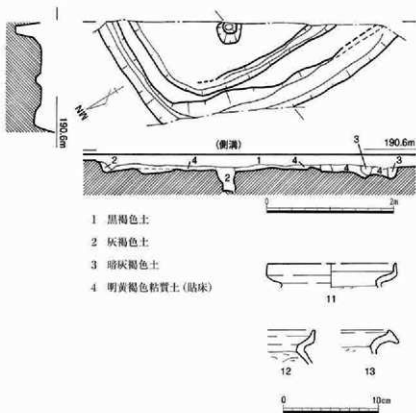


第6図 竪穴住居2(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

外側北西のコーナーが調査区外のため詳細は不明であるが、平面形は概ね隅丸方形になるものとみられる。床面において柱穴を1本確認している。柱穴の底面には礫が埋め込まれており、柱材を安定させるために据えられたものとみられる。

遺物は弥生土器および土師器を出土している。図示した主なものとして、土師器甕 11・12 および弥生土器甕 13 がある。

時期としては出土遺物から弥生時代後期末～古墳時代初頭とみられる。

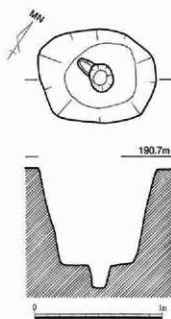


第7図 竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

土壌 (第4・8図、図版3)

竪穴住居1と竪穴住居2との間に位置する。主軸を概ね東西方向にもつ。平面形は不正な円形であり、規模としては長径で95cm、深さ94cmを測る。底面に径20cmほどの小ピットが設けられており、その形態から落とし穴であった可能性も考えられる。

時期については遺物が出土していないため不明であるが、この土壌が落とし穴であるとすれば縄文時代までさかのぼる可能性はある。



第8図 土壌 (1/30)

第3章 金屋1号墳

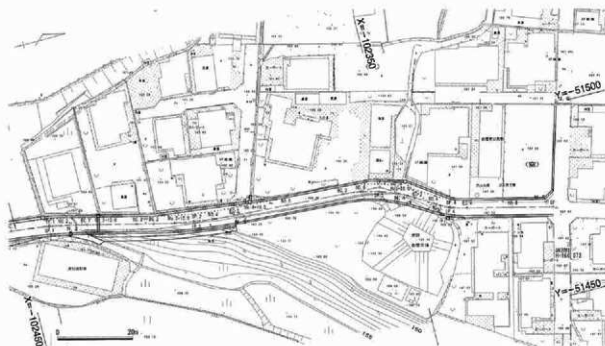
第1節 調査の契機と経緯

金屋1号墳は、金屋古墳群の中のひとつである。金屋古墳群は本来8基の古墳で構成されていたといわれているが、大半が消滅しており、現存するのはこの1号墳と2号墳の2基のみである。地元では古くから「まるこうげ」と呼ばれてきた。2号墳は別名「権現塚」とも呼ばれ、「金の鳶」が埋められている、といった伝説・伝承が残されている¹⁾。1号墳・2号墳ともに葦石を有する方墳として、古くから認識されてきた。

平成21(2009)年、真庭市教育委員会は真庭市建設部建設課より市道金屋東線改良事業の実施にあたっての埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて協議を受けた。計画では道路の拡幅部が金屋1号墳の一部にかかることとなり、極力古墳の現状保護・保存が図れるよう協議を重ねていくこととなった。その結果、道路の拡幅については必要最小限の範囲とし、やむを得ず破壊される部分については発掘調査を実施することで合意をした。真庭市建設課より埋蔵文化財発掘の通知が平成21(2009)年11月26日付け、真建設第170号で提出され、これを受けて真庭市教育委員会で発掘調査を実施することとなった。

註

- 1) 「金屋古墳群」『久世町の文化財』第1集 久世町教育委員会 1980



第9図 古墳位置図 (1/1,000)

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成22(2010)年6月16日から30日まで、実働日数9日間を要して実施した。なお、埋蔵文化財発掘調査の報告については平成22(2010)年7月1日付け、真教生第54号で岡山県教育委員会へ提出している。

調査区の掘削についてはその範囲が狭小なことから、表土除去から終始人力のみで行った。



(日誌抄)

平成22年6月16日(木) 調査開始
 6月29日(火) 墳丘平板測量
 6月30日(水) 調査区埋め戻し作業
 調査終了



調査作業風景

(調査の体制)

調査主体者 真庭市教育委員会
 事務局 真庭市教育委員会
 教育長 大倉 貢
 教育次長 三船光夫
 生涯学習課長 内山恵美子
 調査担当者 主幹 坂田 崇
 作業員 黒瀬 肇、永田敏宏(50音順)

第3節 発掘調査の概要

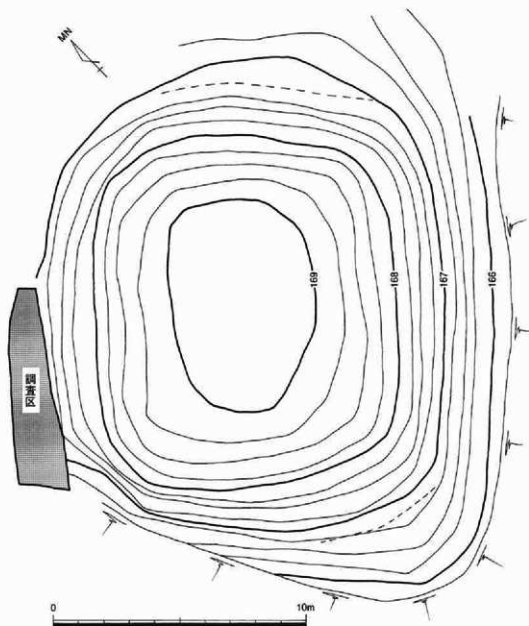
金屋1号墳は住宅団地のすぐ付近に所在し、墳丘表面は芝生が植栽され保護されてきた。墳丘は南北方向で約21mの規模である。平面形態は概ね方形を示しているが、地元住民の話ではかつてより人為的に墳丘の形状が若干の変更を受けている模様である。

調査は、道路の拡幅により破壊される墳丘裾の一部を対象に行った。そのため調査面積は12㎡と非常に狭小である。現状で市道金屋東線が墳丘の西側傍を通っており、墳丘の一部が道路建設時に多

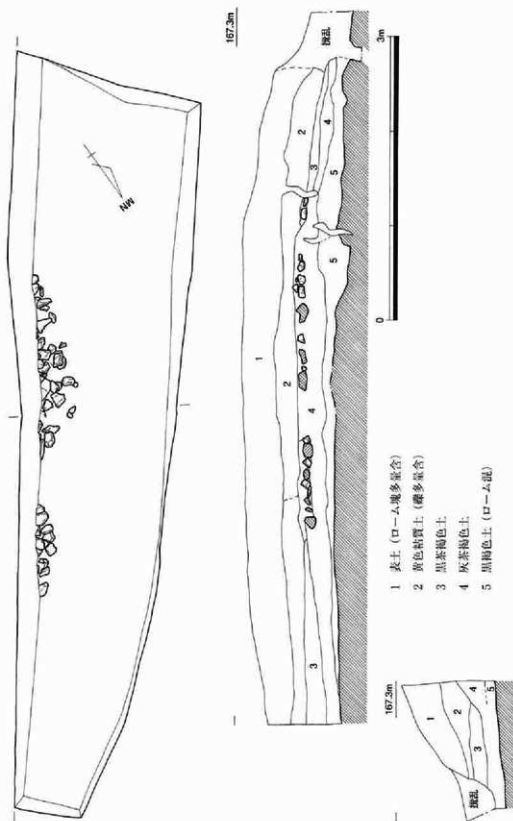
少の影響を受けていることが土層断面から見てとることができる。具体的には層位的に、1層は現地表土であるが、基盤である黄色粘質土を多量に含み、また2層は礫を多量に含む黄色粘質土である。葦石は4層の上部に乗っているが、2層との間に旧表土等に相当する堆積が認められない。このことから、調査区付近の墳丘裾部は、かつて葦石の面まで掘削され、現道を建設する際に生じた排土が盛り上げられたことにより1・2層が形成された、ものであると判断できる。

葦石の一部とみられる礫の集中を確認しているが、裾部であるためあっても上下等の移動が激しく、原位置を保っているものはほとんどないようにみられる。

なお、遺物としては弥生土器または土師器の破片、陶磁器片などを出土しているが、いずれも擾乱土中からの出土や細片であることから図示しえたものはない。



第10図 墳丘測量図 (1/150)



第11図 調査区平面・断面図 (1/40)

第4章 まとめ

大旦遺跡について

今回の調査では、3軒の竪穴住居および1基の土壇を確認している。調査範囲の関係上、竪穴住居は3軒とも残念ながらその一部のみを検出したにとどまり、全容が明らかなものはないが、いずれも弥生時代後期末から古墳時代初頭に営まれたものであることは明らかである。出土遺物から比較的明確に時期の比定ができるのは竪穴住居2のみである。

その竪穴住居2の土器について、若干触れておきたい。甕についてはその形態上の特徴から、口縁部が「く」の字形に屈曲するものばかりであり、口唇端部まで直線的のび脱くおさまる1・2、端部に面を作り外面に稜を表している3・6、端部がやや外反する5、いずれにも属さない中間的な4と分類することができる。高杯については復元および図示ができたものは2点である。7・8ともに、口縁部から脚端部までの様子がわかる資料である。7は杯部口縁が強く外反し、8は杯部が碗状で短脚であることをそれぞれ特徴としている。それらのことから竪穴住居2の出土土器は、概ねⅠ-3期からⅠ-4期¹⁾に該当するとみられる。平成18年度調査で確認した竪穴住居8および竪穴住居9²⁾との時間的關係としては、(21年度)竪穴住居2→(もしくは並行して)(18年度)竪穴住居8→(18年度)竪穴住居9(Ⅱ-1期)であったと考えられる。

大旦遺跡の古式土師器についてはいまだ資料数的に制約があり、遺跡内での編年作業が十分にできる状況にはない。今後の課題として、県北・美作地域の他遺跡での比較等に基づいての詳細な編年検討を行っていく必要がある。

金屋1号墳について

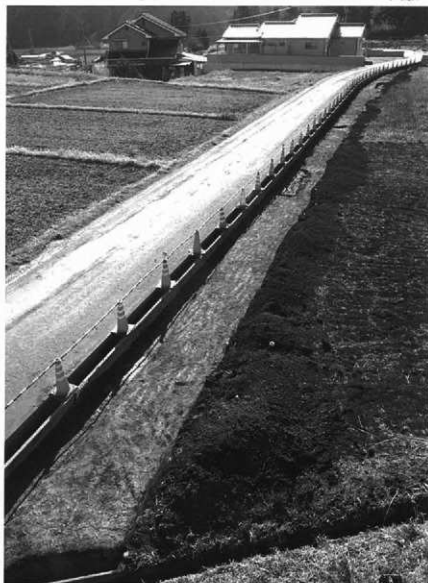
今回の調査はその範囲が大変狭小であったことから、金屋1号墳の墳丘のごく一部を確認したにすぎないものであり、またその状態も後世の攪乱による影響を大きく受けていることから、良好な成果を得ることができた、とはけっしていえないものである。しかしながら一部とはいえ、葺石の残存状況を確認したことや、これまで正式に実施されていなかった墳丘測量を行ったことにより、墳丘の平面形態をあらためて把握することとなった。今後は古墳の性格についてさらに究明していくとともに、その保存についても十分に検討していく必要がある。

註

- 1) 平井泰男他「土師器」『吉備の考古学的研究』(下) 1992
- 2) 坂田 崇「大旦遺跡発掘調査報告」『真庭市埋蔵文化財調査報告』2 真庭市教育委員会 2009

主要参考文献

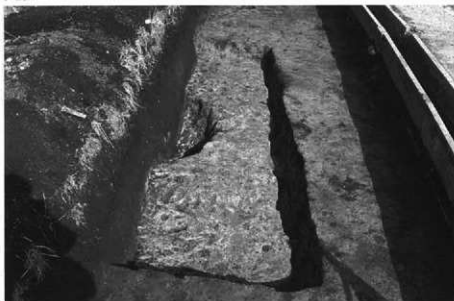
- 柴田英樹他「宮ノ上遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』197 岡山県教育委員会 2006
 高橋 護「土師器の編年—中国・四国」『古墳時代の研究』6 1991
 團 正雄「土居遺跡」『勝央町文化財調査報告』8 勝央町教育委員会 2009
 中山俊紀他「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集 津山市教育委員会 1981



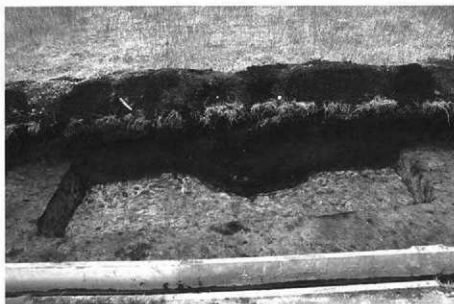
1 調査区全景
(北から)



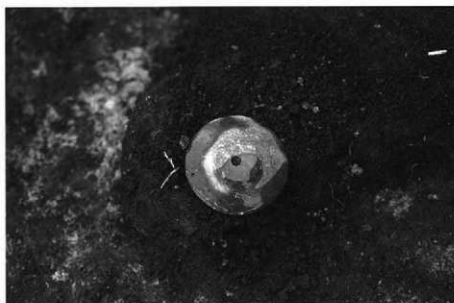
2 壑穴住居 1
(北から)



1 竪穴住居 2
(南から)



2 竪穴住居 2
(東から)



3 紡錘車 (S2)
出土状況

1 竪穴住居 3
(北から)

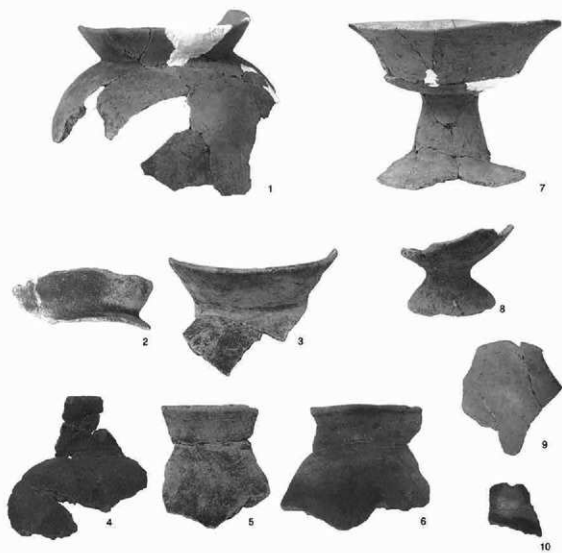


2 竪穴住居 3
(西から)



3 土壌
(東から)





竪穴住居 2 出土土器



竪穴住居 2 出土石器



竪穴住居 3 出土土器

1 墳丘遠景
(南から)



2 墳丘全景
(南西から)



3 葬石検出状況
(北西から)





1 東西方向土層断面
(南から)



2 調査区発掘状況
(南から)



3 調査区発掘状況
(北から)

1 南北土層断面
(南西から)



2 南北土層断面
近景 (西から)



3 南北土層断面
(北から)



報 告 書 抄 録

ふりがな	おおだんいせき・かなやいちごうふん							
書名	大旦遺跡・金屋1号墳							
副書名	市道上連続・金屋東線改良工事に伴う発掘調査							
巻次	—							
シリーズ名	真庭市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	5							
編著者名	坂田 崇							
編集・発行機関	真庭市教育委員会							
所在地	〒719-3194 岡山県真庭市落合垂水 1901 番地 5 In 0867-52-3730							
発行年月日	2011(平成23)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおだんいせき 大旦遺跡	岡山県 真庭市 ついで台 台金屋	33214	旧久世町191	35° 07' 88"	133° 76' 59"	20100125 ～ 20100209	151 m ²	市道上連続 工事に伴う 発掘調査
かなやいちごうふん 金屋1号墳	岡山県 真庭市 目木	33214	旧久世町195	35° 07' 63"	133° 76' 91"	20100616 ～ 20100630	12 m ²	市道金屋東 線工事に伴 う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大旦遺跡	集落	弥生～古墳	竪穴住居3 土壇1		弥生土器・土師器 石器			
金屋1号墳	古墳	古墳	古墳1		—			

印刷データ

紙 質 表 紙=レザック 215kg

本 文=サチン金帯110kg

写真用紙=サチン金帯110kg

文 字 モリサワ オープンタイプフォント

本 文=リュウミン PRO L-KL 14Q 正体

本文用機 Macintosh Adobe InDesign CS3, Adobe Illustrator CS3

写 真 本文用紙=モノクロスキャナー175画

真庭市埋蔵文化財調査報告5

大旦遺跡・金屋1号墳

市道上連線・金屋東線改良工事
に伴う発掘調査

平成23年3月18日 印刷

平成23年3月31日 発行

編集・発行 真庭市教育委員会
岡山県真庭市落合垂水1901-5

印 刷 有限会社 勝山印刷

